

その頃の赤門生活

芥川龍之介

青空文庫

一

僕の二十六歳の時なりしと覚ゆ。大学院学生となりをりしが、当時東京に住せざりした
 め、退学届を出す期限に遅れ、期限後数日を経て事務所に退学届を出したりしに、事務の
 人は規則を厳守して受けつけず「既に期限に遅れし故、三十円の金を収めよ」といふ。大
 正五六年の三十円は大金なり。僕はこの大金を出し難き事情ありしが故に「然らばやむを
 得ず除名処分を受くべし」といへり。事務の人は僕の将来を気づかひ「君にして除名処分
 を受けん乎、今後の就職口を如何せん」といひしが、畢に除名処分を受くることとなれり。
 僕の同級の哲学科の学生、僕の為に感激して曰、「君もシエリングの如く除名処分を受
 けしか」と！シエリングも亦僕の如く三十円の金を出し渋りしや否や、僕は未だ寡聞
 にしてこれを知らざるを遺憾とするものなり。

二

僕達のイギリス文学科の先生は、故口オレンス先生なり、先生は一日僕を路上に捉へ、
々々数千言を述べられてやまず。然れども僕は先生の言を少しも解すること能はざりし故、
唯雷に打たれたる唾の如く瞠目して先生の顔を見守り居たり。先生も亦僕の容子に多少
の疑惑を感じられしなるべし。突如として僕に問うて曰く、『Are you Mr. K.?』僕、答
へて曰く、『No, Sir.』先生は——先生もまた雷に打たれたる唾の如く瞠目せらるること
少時の後、僕を後にして立ち去られたり。僕の親しく先生に接したるは実にこの路上の
数分間なるのみ。

三

僕等「新思潮社」同人の列したるは大正天皇の行幸し給へる最後の卒業式なりしな
るべし。僕等は久米正雄と共に夏の制服を持たざりし為、裸の上に冬の制服を着、恐る恐
る大勢の中にまじり居たり。

四

僕はケエベル先生を知れり。先生はいつもフランネルのシャツを着られ、シヨオペンハウエルを講ぜられしが、そのシヨオペンハウエルの本の上等なりしことは今に至つて忘るること能はず。

五

僕は確か二年生の時^{ドイツ}独逸語の出来のよかりし為、独乙大使グラアフ・レツクスよりアルントの詩集を四冊貰へり。然れどもこは真に出来のよかりしにあらず、一つには喜多床^{きたどこ}に髪^{かみ}を刈^かりに行きし時、独乙語の先生に順^{ゆづ}を譲り、先に刈^からせたる為なるべし。こは謙遜^{けんそん}にあらず、今なほかく信じて疑はざる所なり。

僕はこのアルントを郁^{いく}文^{ぶん}堂^{だう}に売^うり金六円にかへたるを記憶す、時^じ来^{らい}星^{せい}霜^{さう}を閱^{けみ}すること十余、僕のアルントを知らざること少しも当時に異ることなし。知らず、天涯のグラアフ・レツクスは今^{いま}果^は緒^{たしや}顔^{がん}旧^{きう}の如くなりや否や。

六

僕は二年生か三年生かの時、矢代幸雄^{やしろゆきを}、久米正雄^{くめまさを}の二人と共にイギリス文学科の教授方を攻撃したり。場所は一つ橋^{ひとばし}の学士会館なりしと覚ゆ。僕等は寡^{くわ}を以て衆にあたり、大いに凱歌^{がいか}を奏したり。然れども久米は勝^{かち}誇^{ほこ}りたる為、忽ち心臓に異状を呈し、本郷^{ほんがう}まで歩いて帰ること能^{あたは}ず。僕は矢代と共に久米を担^{かつ}ぎ、人跡^{じんせき}絶えたる電車通りをやつと本郷^{げしゆく}の下宿^{げしゆく}へ帰れり。(昭和二・二・一七)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

その頃の赤門生活

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>